

歴史時代考古学の視点

藤 井 直 正

一 は し が き

日本列島を席卷する各種の開発事業に伴って、北は北海道から南は沖縄県に至る全国の各地で、遺跡の発掘調査が行なわれている。規模の小はさまざまであり、遺跡の種類も多岐にわたり、旧石器時代から歴史時代に及んでいるが、その件数は年ごとに増加の一途をたどっているのである。

こうした現象は、全国の各地において、各種の建設・土木事業が、規模の大小はあっても、相次いで計画され施行されていることが最大の原因であるが、昭和五十年に文化財保護法が改正され、周知の遺跡、すなわち埋蔵文化財包蔵地に対する規制が強化されたこと、工事計画の策定段階での協議が徹底して来たこと、言いかえれば都道府県・市町村における文化財保護行政の著しい進展を単的に示していることに他ならないのである。

その結果として、“遺跡・遺物を対象として過去を考えること”を目的とする考古学は、あたかも現代の寵児であるかのように脚光を浴び、発掘調査の現場での新しい発見や遺物が出土するたびにニュースとして全国に報道され、一つのブームをよんで来たのである。

考古学がおかれているこうした現状については、それが決して正常な状態ではなく、さまざまな問題をはらんでいることは勿論であり、それに対する研究者としての反省、あるいは学会としての取り組み、社会からの批判等もないわけではないが、一つの趨勢として、も早どうにもならない状況に立ち至っていることも事実である。また、こうした現状にあって、年々何百冊・何千冊という数の調査報告書が刊行され、それよりも発掘調査によって出土する遺物は龐大な量に上っているものであり、これらの情報の把握・入手は、研究者はもとより大学の研究室において

も不可能に近いのである。

今回、本稿においてとり上げて見ようと思う課題は、こうした状況におかれている考古学の第一線から一步下がって、次の二つのことについて、ここ数年来、私自身が経験し、実践して来たことを通して私なりの考えをまとめて見たものである。一つは、ある一つの地域を対象として、考古学の立場から、地域に所在する考古学的資料―遺跡と遺物―を十分に生かしながら、地域史・地方史を考え、まとめて行く方法へのアプローチであり、いわば歴史時代考古学の実践記録である。いま一つは、たまたま昨年度に私が担当した追手門学院大手前高等学校・中学校敷地の発掘調査、および現在進めている大手前女子短期大学敷地の発掘調査を通じて、標題とした考古学の視点に関して、二三の問題を指摘して見たい。

以上二つを総括して「歴史時代考古学の視点」とした。冒頭に述べた考古学の現状に対する私自身の批判であり、私なりの考古学への取り組み方でもある。大方のご叱正・ご批判を得ることができれば幸である。

二 遺跡と文書・記録

わが国考古学の泰斗であり、はじめて考古学を科学的に体系づけられた浜田青陵博士は、その著『通論考古学』で、

考古学とは、過去の人類の物質的遺物を資料として、人類の過去を研究する学問である。

と定義づけられた。人類のはじまりから現在に至る長い歲月の歴史の中で、文書・記録など、いわゆる文献資料がつくられるのは後世のことであり、世界のどの地域においても、文献資料のない時代の歴史は、考古学的方法による解明が必要であることはいうまでもない。日本列島の場合でも、旧石器時代から現代に至る長い歴史の中で、文献資料が出現するのは古墳時代以後のことであり、旧石器時代から縄文・弥生時代の解明は考古学の独壇場であり、明治時代から現代まで多くの先学によって数かずの業績が積み重ねられ、今日の日本考古学の基礎が築かれて来たのである。

考古学が扱うのは、文献資料のない時代だけではない。文献資料がある時代においても文献資料が社会の事象すべてを文章としてのこしているわけではなく、また文献資料があっても、そこに記されていることがらを確認する上においても、物質的資料を扱う考古学の果たす役割は大

きい。こうした歴史考古学の役割を、佐藤興治氏は次のように述べられている。⁽¹⁾

歴史考古学が主として扱ってきたものに宮殿、城柵、地方官衙、寺院、生産関係、集落、墓地などの遺跡と出土遺物があるが、これらのうちあるものについては文献的な裏付けが可能である。文献史料によって遺跡・遺物との年代と性格を知ることの意味は大きく、歴史考古学のもっとも特徴とするところでもある。中国のように文献史料がきわめて古くさかのぼる例は別にしても、わが国のように信憑性のある史料の出現が新しい場合、その活用範囲は限定されるが、史料の少ない段階では、具体性に富む歴史復原はきわめて困難であり、また史料の豊富な中・近世においても史料のもつ抽象性はある面では避けられない。このような中であって遺跡・遺物の実証的研究を目的とする考古学は、独自の成果をあげることができるわけで、その意味では考古学は遺跡・遺物が存在する限り明治・大正時代まで及ぶことも可能である。

そこで、私自身のフィールドであり、ホーム・グラウンドである河内の地域における二つの事例を中心に、歴史考古学の方法による古代・中世史の解明を試みたい。

1 水走氏と大江御厨

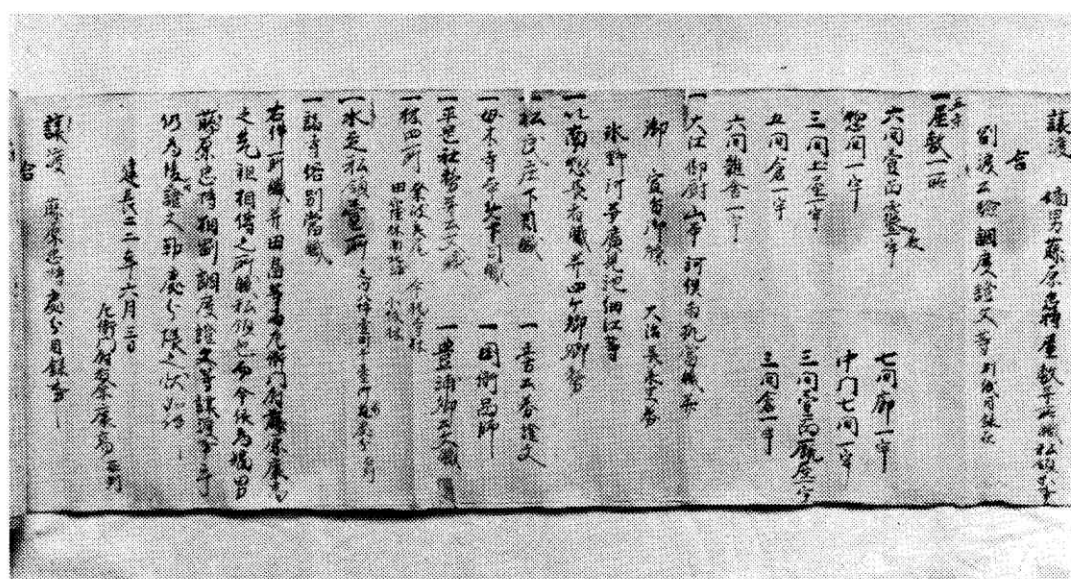
——古代末・中世の河内——

ここに一通の古文書がある。東京大学史料編纂所に架蔵されている『水走文書』の原本の一部で、室町時代の写しであるが、畿内における典型的な中世土豪であり、古代末期から中世において河内国の中央部に勢力を有した水走氏の財産譲状の冒頭の一通である。この『水走文書』は、先年の枚岡市史の編さんに際して、私自身がその原本の所在を追跡したものである⁽²⁾が、鎌倉時代の建長四年（一二五二）から南北朝時代の永徳三年（一三八三）に至る代々の財産譲状とその目録であり、水走氏の領有した諸領・諸職と、各時期における推移を具体的に知ることのできる史料として、つとに学界に知られ、さまざまな角度から考察が加えられて来たものである⁽³⁾。

この一通の古文書を資料として、これを考古学の立場からとらえ、中世における河内の一地域の歴史の復原を試みて見よう。まず史料そのものを掲げ、対象とする項目を抽出する⁽⁴⁾（第1図）。

① 水走氏の屋敷 「屋敷一所」として「五条」と注記されているように、水走氏の屋敷は河内国河内郡五条にあった。井上正雄氏の『大阪府全志』には、

東方山田に水走左近の宅地跡あり。氏は枚岡神社の神官なり。伝へいふ。天正七年織田氏の枚岡神社を焼残するに当り、氏は神封を掌りて此に住せしかば、織
歴史時代考古学の視点



第1図 建長四年「藤原康高讓状写」(水走文書)

讓渡 嫡男藤原忠持屋敷并所職私領等事
合

副渡公驗調度證文等別紙目錄在

五条

一屋敷一所^①

六間壹面寢殿一字 七間廊一字

惣門一字 中門七間一字

三間土屋一字 三間壹面廐屋一字

五間倉一字 三間倉一字

六間雜舍一字

一大江御厨山本河俣兩執當職并

御 宣旨御牒 大治長承里券

水野河并廣見池細江等^②

一以南惣長者職并四ヶ郷務

一松武庄下司職 一旁公券證文

一母木寺本免下司職 一國衙圖師

一平岡社務并公文職 一豐浦郷公文職

一林四所 奈岐良尾 今楊寺林
田窪林南北浦 小坂林

一水走私領一所之内八坪壹町千臺御前處分 在判

一諸寺俗別當職

右件所職并田畠等者左衛門尉藤原康高

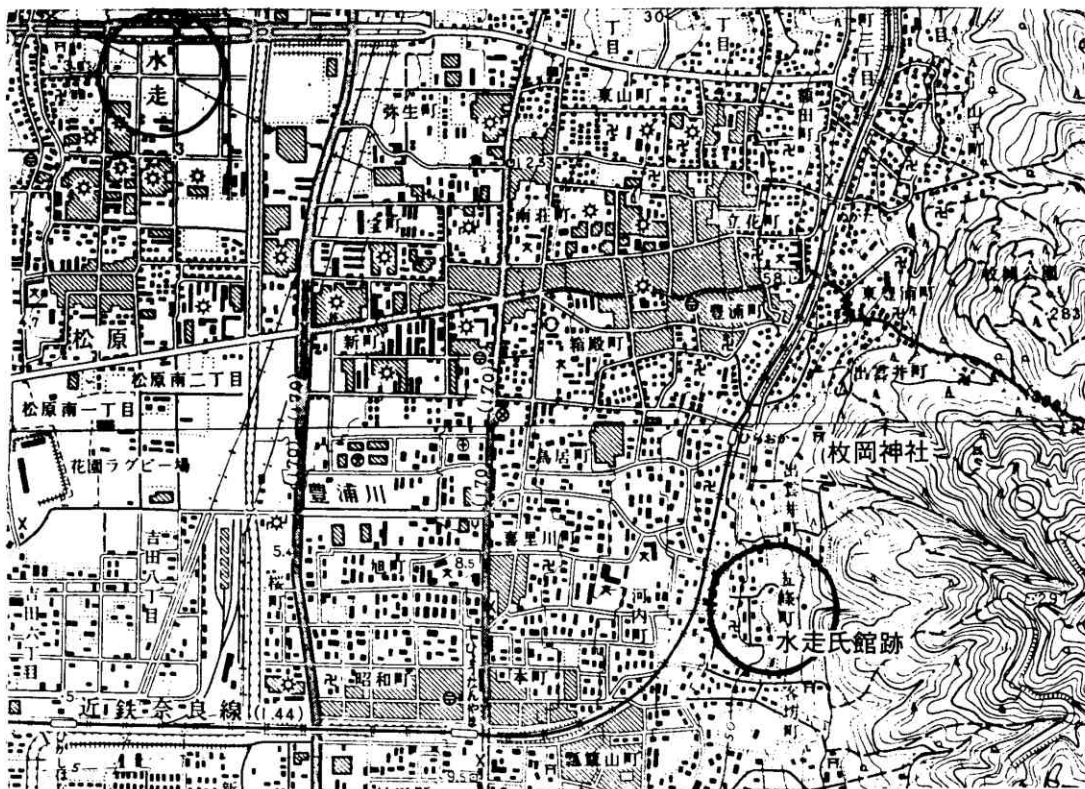
之先祖相傳之所職私領也而今依爲嫡男

藤原忠持相副調度證文等讓渡事畢

仍爲後日證文勒處分之帳之狀如件

建長二年六月三日

左衛門尉藤原康高 在判



第2図 水走氏館跡と水走私領の位置 (1:25000「生駒山」「信貴山」)

田氏の逐ふところとなり、遁れて大和に走り邸舎遂に墟となれりと。
(後略)

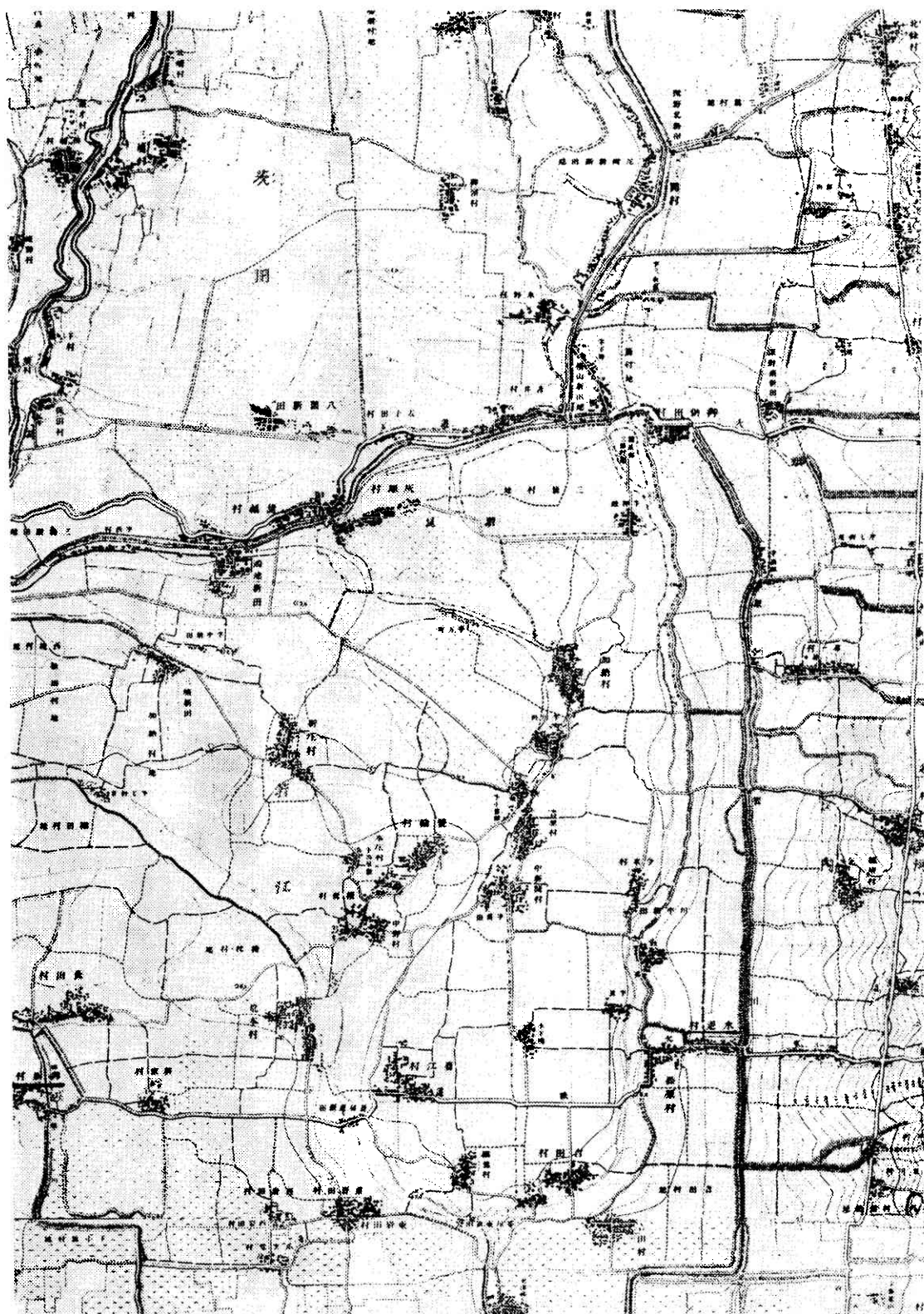
と記されている。近世に五条村の庄屋であった野口家にのこされている村絵図を見ると「水走屋敷」と記された一画があり、明治九年(一八七六)五条村戸長野口与太郎が提出した絵図を見ると「枚岡旧神官水走春忠上地四百五十番字山田畑式反壺畝六歩」とあり、現地と対照して、現在の五条町一二八一〜六番に当たることがわかる(第2図)。

昭和四十八年、私が東大阪市教育委員会に在任中、この屋敷跡の発掘調査を実施したが、後世にかなりの改変が加えられ、本来の状態でとどめていないが、遺構の存在していることを確認することができた。⁽⁵⁾

建長四年(一二五二)における水走氏の屋敷は、

寢殿	六間	塙面	一字	厩屋	三間	塙面	一字
廊	七間	一字	倉	五間	一字		
惣門	一字	倉	三間	一字			
中門	七間	一字	雑舎	六間	一字		
土屋	一字						

から成っている。建物の種類と規模が記されているが配置はわからない。しかし、鎌倉時代における土豪層の屋敷を構成する建物の種



第3図 大江御厨の所在地（明治18年「大坂仮製地図」）

類・規模がわかり、「法然上人絵伝」をはじめ絵巻物に描かれている屋敷の情景等も参考にして、発掘調査による所見を合わせて考察する場合の資料となるものである。

② 大江御厨 代々の譲状・目録の冒頭に記されている水走氏重代の所職として「大江御厨山本河俣両執当職」がある。大江御厨は、河内国の中央部にひろがっていた皇室御領で、その漁業・交通・交易等さまざまな職務を統轄し管理していたのが水走氏であった。史料の③に見える「氷野河并広見池細江」を合わせて考えて見よう(第3図)。

現在の東大阪市の北部から大東市・四条畷市にかけての地域には、古代・中世において広大な水面がひろがっていた。かつては生駒山ろくまで及んでいた河内湾・河内潟のなごりであり、縄文時代晩期から弥生時代のはじめにかけて淡水化し、その後淀川・大和川のはこぶ土砂によって挟められて河内湖になって行った過程が地質学上立証されている。⁽⁶⁾この河内湾・河内潟の存在と、こうした自然環境における原始・古代の人びとの生活については、生駒山ろくに点在する諸遺跡や大阪市東区に所在する森の宮遺跡の調査によって明らかにされ、また河内平野の中央部に存在する瓜生堂遺跡・西岩田遺跡等の調査によって、弥生時代から古墳時代の様相が具体的に把握されている。⁽⁷⁾それ以後の歴史時代の遺構も一部ではあるが検出され、遺物の出土も見ているが、未だそれを歴史的に把握する試みはなされていない。ここでとり上げる大江御厨を中心とする文献資料は、考古資料の欠を補うことができると共に考古学的資料を解釈する上にも役立つのである。

『養老律令』の職員令によると、宮内省の管轄下にあつて膳部のことを司る大膳職に「雑供戸」が付属しているが、雑供戸とは、鵜飼・江人網引等の漁業に従事する人びとで、湖沼や海浜に居住していた。河内湖の水辺におかれた供御江は、『類聚國史』に、「供御堤外赤江・堤内赤江」があり、のちには「竹門江・賀沼絶間江・大治江」の三カ所が見えている。これらは河内湖の北辺を指すものと思われるが、地名がつかないため現地比定はむずかしい。また、『延喜式』には、内膳司に所属する供御の御厨として「河内江厨」があり、朝廷の食膳に魚介類・鳥類・水草を供進するところが定められている。この河内江厨が大きく発展し、大江御厨となったのは延喜五年(九〇五)のことで、『山科家旧藏文書』中の元永二年(一一一九)の官宣旨はそれを伝える史料である。

左辨官下 河内國

應遣官使、任延喜五年國司請來、令檢注言上大江御厨四至并供御人交名在家免田地所等事

歴史時代考古学の視点

副下延喜五年國司請文案一通

右、得御厨子所今月九日解脩、彼御厨司厨、當御厨者、依藏人所牒狀_{己下}、國宣承知、依宣行之

元永二年七月十六日

大史小槻宿禰在判

左中辨源朝臣在判

こうして成立した大江御厨の管理・運営に当たる執当職として登場したのが水走氏である。執当職とは供御人の長であり、朝廷に貢進する品物の調達と管理、漁業・交通・運輸、市場の監督など一切の職務を管掌したものと考えられている。「山本」と「河俣」はそれぞれ地名で、その管理事務所の所在地であったと思われる。このうち山本は八尾市山本に当てる説もあるが現在では不明である。河俣は東大阪市川俣で、河内湖の西岸に位置する。また代々の譲状に「氷野河浮津」と記されている「氷野」は、現在の大東市氷野で、それは浮津すなわち港であったと考えられるが、川俣から氷野までは河内湖の水面を横切り、ここから淀川をさかのぼって京にはこぼれたのであろう。⁽⁸⁾

この広大な皇室領大江御厨から供進した品物については史料に乏しいが、『延喜式』卷三九、内膳司の項には、

荷葉

稚葉_{ワカイハ}七十五枚。波斐_{ハヒ}四把半。並起_{並起}五月中旬_一。盡_盡六月中旬_一。

壯葉_{ハスノネ}七十五枚。蓮子_{ハスノネ}廿房。稚藕_{ハスノネ}十五条。起_起六月下旬_一。盡_盡七月下旬_一。

黄葉_{ハスノネ}七十五枚。蓮子_{ハスノネ}廿房。稚藕_{ハスノネ}十五条。起_起八月上旬_一。盡_盡九月下旬_一。

右河内國所_レ進。各隨_ニ月限_ニ隔_ニ一日_一供之。

の記載がある。また、

造_ニ雜魚_ニ十石味塩魚六斗_{河内國江}。厨所_レ進料

という字句も見られる。河内湖で行なわれていた漁業の実態は現在のところそれを裏附ける文献やその他の資料もほとんどないが、水面と水辺の情景は、元禄二年（一六九八）に河内路を旅した貝原益軒がその紀行文『南遊紀行』に書き留めている文章が参考になるであろう。⁽⁹⁾

かつての河内湖南縁の汀線と考えられるところに「御厨」の地名がのこっている。そこは奈良街道が通じる交通上の要地でもあるが、川俣に

近い西堤遺跡や、意岐部・新家・西岩田等の諸遺跡で検出されている歴史時代の遺構や出土遺物は、ここに取り上げた大江御厨との関連において捉えることが可能であり、⁽¹⁰⁾それを考えることが、これらの考古学的資料を河内の古代・中世史に位置づけることができるのである。

2 火葬墳墓群と被葬者

生駒山の西ろくに位置する現在の東大阪市石切地区の山腹からは、これまで数カ所で奈良・平安時代のものと考えられる蔵骨容器が出土し、辻子谷を下った中石切町の一地点では墓誌と看做される板状の土製品が出土している。これらの資料については、それまでの知見をまとめて紹介しておいたが、⁽¹¹⁾これに加えて、昭和五十三年、近鉄石切駅の東がわで宅地造成に伴う発掘調査によって、新たに火葬墓群が検出された。とくに注意を惹くのは石製銚帯が出土したことであり、その佩用が官位によって定められているものであることから、これらの火葬墓群が築造された背景として、官人層の存在が考えられるからである。昭和五十三年の一月には、奈良市古瀬町の茶畑から例の「大安萬呂墓誌」が発見されたことでもあり、あれほどの反響は呼ばなかったにしても、河内の地方史としてはビッグ・ニュースであるのに何の報道もされなかったのは意外であるが、これこそ視点の問題なのである。この調査については概要が報告されており、⁽¹²⁾調査担当者によってこれまでの資料の集成が発表されている。⁽¹³⁾私自身、この発見をまつまでもなく官人の存在を想定し、この地を本貫とした大戸首、⁽¹⁴⁾のちの良枝宿祢一族の墓域であることを仮説として提出しているが、改めて標題との関連において私見を述べて見たいと思う。

現在の石切地区は、古代には河内国河内郡大戸郷とよばれていた。『倭名類聚抄』国郡部を見ると、

河内郡 英多 新居 櫻井 大宅 豊浦 額田^{沼賀} 大戸

とある。この大戸郷に居住していた氏族として、大戸の地名を負う大戸首がある。『新撰姓氏録』河内国皇別に、

大戸首

阿閑朝臣同祖、大彦命男比毛由比命之後也、謚安閑御世河内國日下大戸村造立御宅、爲首仕奉行、仍賜大戸首姓、日本紀漏

とあるが、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘に見える大彦命を祖とする阿倍氏の一族で、安閑天皇の御世に大戸御宅（屯倉）がおかれたのに際し

て奉行し、大戸首の姓を賜ったことを注記している。

大戸首は良枝宿祢と改姓された。それは承和三年（八三四）十二月のことで、『續日本後紀』は次のように記録している。

乙未、散位外従五位下大戸首清上、雅樂笛師正六位同姓朝生等十三人、賜姓良枝宿祢、安倍氏之枝別也

つづいて承和三年（八三六）五月条には、

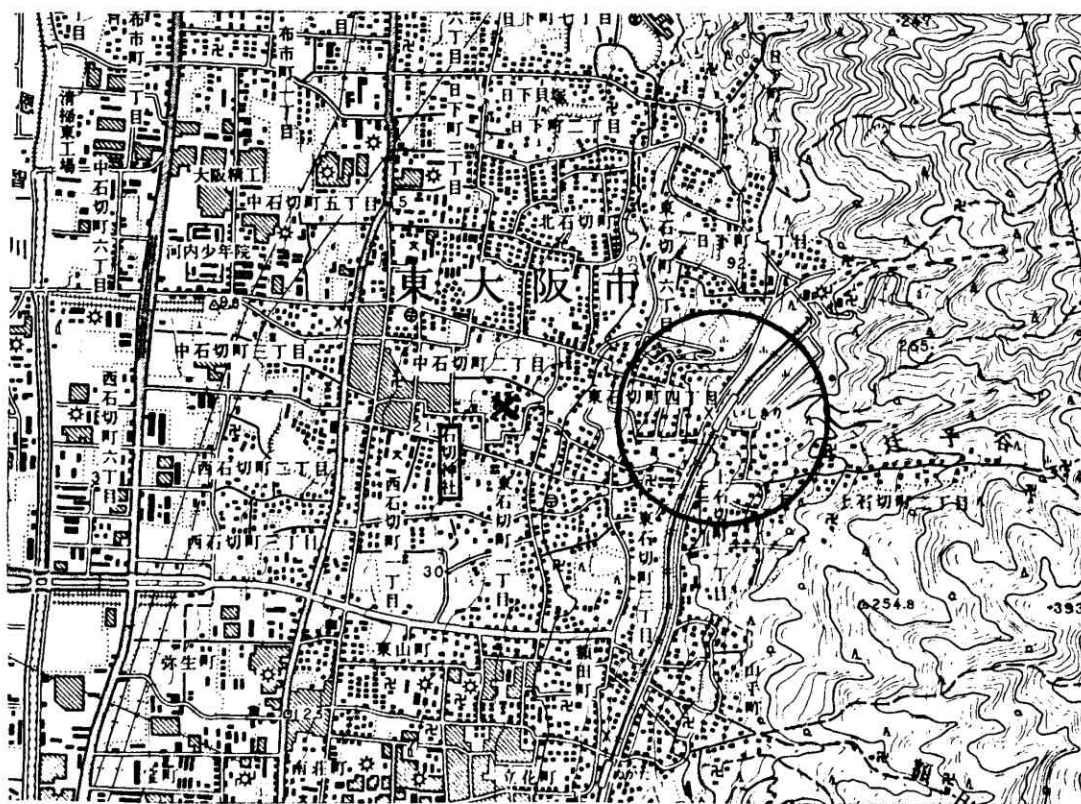
丙子……河内國人遣唐音聲長外従五位下良枝宿禰清上、遣唐画師雅樂笛師同姓朝生、散位春道宿禰吉備成等改本居貫附右京七条二坊とある。これによって、良枝宿祢清上が遣唐音聲長に任じられていること、同姓朝生が遣唐画師であり、雅樂笛師であったこと、この二人が遣唐使に随行した榮譽ある人物であったことが知られる。

ところで、この年代における遣唐使は、「承和の遣唐使」とよばれ、舒明天皇の二年（六三〇）犬上御田歙を大使として派遣された第一次から十七回目を数える第十七次の遣唐使で、承和元年（八三四）正月に任命があり、大使藤原常嗣、副使小野篁が発令された。承和三年五月に一行は難波から乗船し、十七日に唐土に向かって出帆した。しかし第一船と第四船は漂着し、第二船と第三船は漂廻して目的を達することができず、改めて承和五年（八三八）六月出帆した。この「承和の遣唐使」の経過と政治的背景については、佐伯有清氏の『最後の遣唐使』（講談社現代教養新書、昭和五三年）にくわしく述べられている。⁽¹⁵⁾

良枝宿祢出身の清上は、遣唐音聲長（遣唐使に随行して雅樂を演奏する人びとの指揮者であろう）という大役を持って唐に渡ったのであったが、悲しいことに帰国することができなかった。『三代實録』貞観七年（八六五）十月条には、清上を師とした和邇部宿祢大田磨の略伝をのせているが、その文中に師良枝宿祢清上のことを記している。

廿六日甲戌、雅樂權大允外従五位下和部宿禰大田磨卒、大田磨者右京人也、吹笛出身、備於伶官、始師事雅樂權少屬外従五位下良枝宿禰清上、受學笛、清上特善吹笛、音律調弄皆窮其妙、見大田磨有氣骨可教習、因如意而教之、承和之初、清上従聘唐使、墮

入於大唐、歸朝之日、船遭逆風、漂南海賊地、爲賊所殺、本姓大戸首、河内國人也、藤原常嗣を大使とする遣唐使の中であって、音聲長という大役を担い、都長安に赴いてよくその任を果たしたのであったが、不幸にもその帰途に船が逆風に遭い、南海に漂着して不帰の人となったのである。



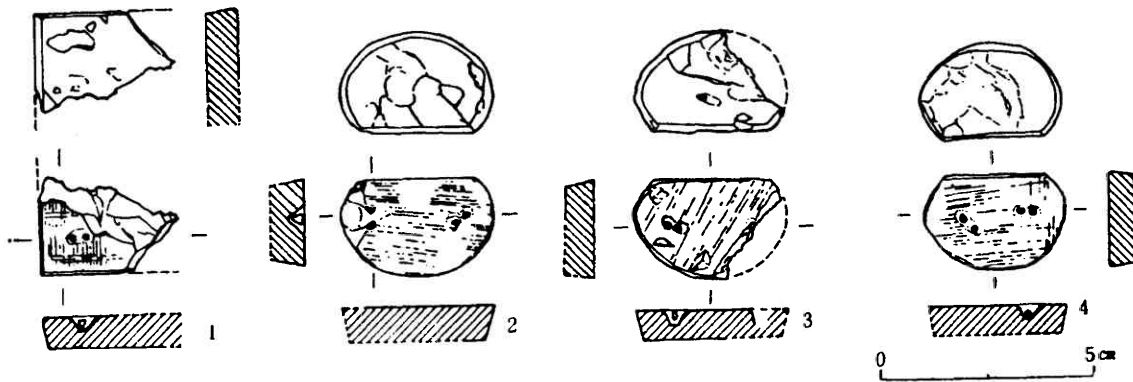
第4図 石切地区の火葬墓域 (1:25000「生駒山」×印は墓誌板の出土地)

良枝宿祢の一族には、さらに『三代實録』元慶七年(八六五)正月条に、

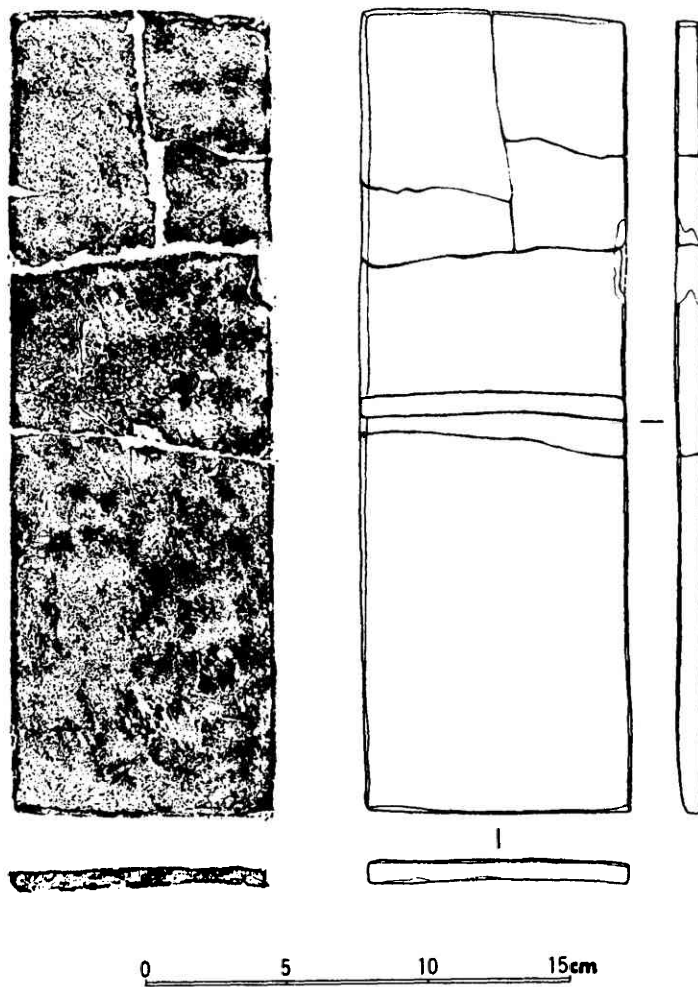
七日甲戌、天皇御_ニ紫宸殿、覽_ニ青馬、賜_ニ宴群臣、奏_ニ女樂、宴竟賜_ニ祿、各有_ニ差

として、各自、外従五位下の位を賜わった群臣の中に良枝宿祢貞行の名が見え、翌八年(八六六)五月条によると、この貞行が尾張介に叙せられたことが知られる。また、角田文衛氏の所蔵で『平安遺文』第九巻補遺、および『枚岡市史』第三冊史料編一に収録されている昌泰年間(八九八〜九〇二)の「河内国河内郡地売券」(断簡)にも、四至保証刀祢の一人として良枝宿祢有實の名を見出すことができ、本貫の地における一族の居住と繁栄がうかがえるのである。

ここで石切地区における蔵骨器の出土地をふくむ火葬墓の分布を見ると、まず近鉄奈良線石切駅を中心とする区域がある(第4図参照)。このあたり一帯は古くから千手寺山とよばれて来たが、昭和三十六年、線路西側の採土地から二つの蔵骨器が出土した。また昭和五十三年の発掘調査で土壙・甕棺墓・木棺直葬墓等が検出されたのは、かつては尾根がつづいていた線路の東側の斜面である。石製鍔帯は土壙中から四個(巡方一個・丸柄三個)が検出され、火に罹っていることから火葬墓に伴うものと見られるが、どの墳墓の副葬品であったかは明らかではない(第5図)。この場所から尾根をずっと東



第5図 上石切町出土の石製銚帯（東大阪市道跡保護調査会『調査会ニュース』No.11・12より）

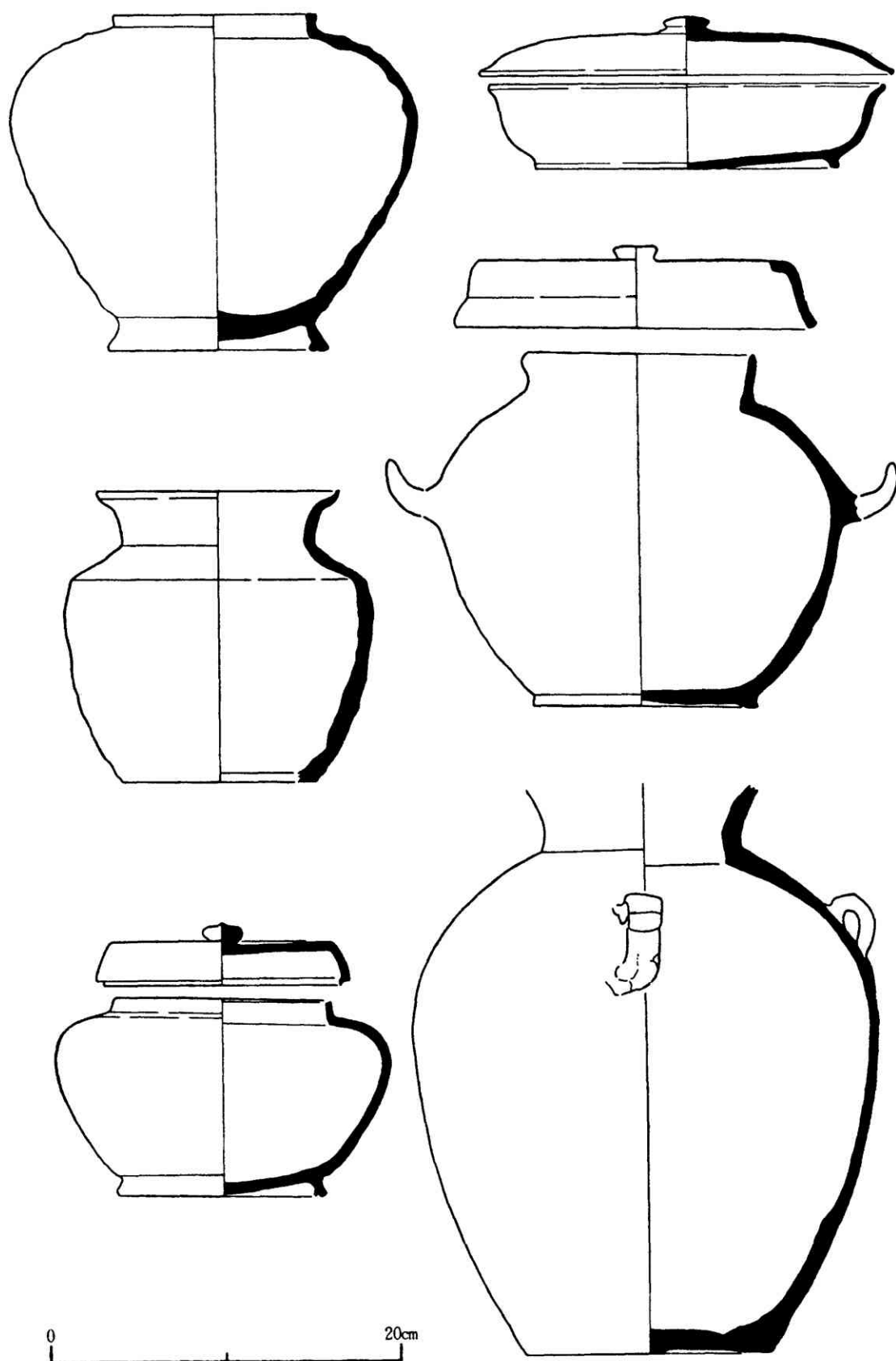


第6図 中石切町出土の土製墓誌板

へ上った上石切町の一地点では、土師質の壺が出土し、中に銀製の和同開珎一枚がおさめられていたという。この資料も先年紹介したが、蔵骨器と考えて誤らないであろう。¹¹⁷⁾それから、これも先に紹介し、墓誌板と考えられる板状の土製品が出土したのは、辻子谷を下った中石切町の一点で、出土したのは明治の末年であるが、故小松重一氏の見聞によって凝灰岩製骨櫃の存在と、土製の板は当初二枚存在していたことが知られる。蔵骨器は、さらに額田駅との中間、現在宅地となっているところで一個、日下町^{くさか}正法寺山の南斜面で一個がそれぞれ出土している。これらの資料は上野氏の論文に集成されているが、一部配列をかえて掲載した(第7図)。

以上に見た火葬墓の分布範囲はかなりのひろがりを見せてはいるが、一つの墓域と考えられ、その年代は八〜九世紀におくことができる。この区域は、時代をさかのぼると後期古墳の密集地でもある。早くから住宅地として開発されたために現在では痕跡さえのこっていないが、かつては数十基をこえる横穴式石室墳の存在をみとめることができる。中でも上石切町に所在した墓尾^{はかのお}古墳群は、尾根を利用して順次築かれた五基の小群であるが、狭長な横穴式石室を主体とし、陶棺が使用されており、古墳時代後期でも終末期に近い時期に築造された古墳として著しい特色を示すものとして注目されて来た。¹¹⁸⁾そのうち三号墳は完存していたが、昭和四十五年に宅地造成のために壊されることになり、石室の再調査と墳丘の全面発掘が行なわれた。その結果、墳丘は三段築成の方形墳で、初重の一边が約一五呎をはかるが、それは唐尺に換算して五〇尺に近い数値となり、大化の薄葬令の規定に準拠して築造されたものと考えられることがわかった。この墓尾三号墳については、調査を担当した原田修氏が綿密な考察を報告書に載せている。¹¹⁹⁾

こうして見ると、律令制下において河内国河内郡大戸郷に所属した現在の石切の地域には六世紀後半から七世紀に築造された古墳にはじまり、甕棺葬・木棺直葬を一部にふくんで火葬墓に至るまでの墓葬が、一つの墓域の中に存在することが知られる。大化の薄葬令についてはその真偽をめぐる議論もあるが、この地域では横穴式石室を主体構造とする墳丘をもった古墳の築造が行なわれなくなったのちも、さまざまな墓制によって墳墓が営造されていたことが知られるのである。それはとりも直さず一族の勢力の消長を物語るのであり、その氏族こそ大戸首―良枝宿祢なのである。八〜九世紀の火葬墓では、銀製の和同開珎にしても、石製の袴帯にしても地方豪族の火葬墓の副葬品としては異例のものである。しかし、文献に見られるように、従五位下の位をもち、遣唐音声長・遣唐画師・笛笙監あるいは尾張介などの任務を担う官人を出した家柄であったことを思うと、この墓域の営造者として浮かび上って来る氏族としてふさわしい。



第7図 石切地区出土の蔵骨器（『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』より）

奈良・平安時代における貴族・官人の服装については、「衣服令」に規定があり、礼服・朝服・制服の三つが定められている。石製鈐帯の使用にまでは及んでいないが、『延喜式』巻四十一、彈正台の項に見える次の記載は、これまであまり注意されていないようであるが、これらの問題を考える場合に役立つ資料である。参考のために必要な部分を抄出しておく。

凡白玉腰帶。聽三位以上及四位參議著用^レ。玳瑁。馬腦。斑犀。象牙。沙魚皮。紫檀。五位已上通用。

凡紀伊石帶、隱文王者及定摺石帶參議已上。刻^レ鏤金銀帶及唐帶五位已上並聽^レ著用^レ。紀伊石帶白哲者。六位已下不得^レ用^レ之。

石帯についての細かい規定であることに注意しなければならないが、「紀伊石帯」とはどういうものを指しているのでしょうか。一つの研究課題である。

注

(1) 佐藤興治氏「歴史時代の考古学的研究」(大塚初重・戸沢充則・佐原 真編『日本考古学を学ぶ(1)』所収、昭和五三年一月)
水走氏と大江御厨

(2) 現在、埼玉県所沢市に在住されている水走寿宏氏が当主で、東京大学史料編纂所架蔵の『水走文書』と富山県新湊市の西宮家の旧蔵であった『西宮重美氏所蔵文書』の原本を所蔵されている。この経過については「水走と水走文書」(『ひらおか』第一二号)にくわしく記しておいた。

(3) 林屋辰三郎氏「鎌倉政権の歴史的展望」(『日本史研究』第二二号、昭和二年四月、『古代國家の解體』所収、昭和三年二月)

戸田芳美氏「中世の布施地方」(『布施市史』第一巻、昭和三七年四月)

佐藤虎雄氏「水走文書」(『枚岡市史』第三巻史料編一、昭和四一年三月)および「中世の枚岡」(『枚岡市史』第一巻本編、昭和四二年一月)

(4) 『水走文書』のうち、室町時代につくられた文書写の冒頭、「水走家系譜序」の次に掲載されている文書である。水走左衛門尉康高が、建長四年(一二五

二)六月二日に、嫡男忠持に対して、先祖相伝の所職・所領を目録証文を相副えて譲与した時の譲状である。

(5) 東大阪市教育委員会『水走氏館跡の調査』(東大阪市埋蔵文化財調査概報12、昭和四八年三月)

(6) 梶山彦太郎・市原 実氏「大阪平野の発達史―14Cデータからみた―」(『地質学論集』第七号、昭和四七年二月)および「大阪平野むかしむかし」(『国土と地理』第一八号、昭和四八年三月)

(7) 藤井直正「河内平野の形成と古代史の展開」(『歴史研究』第二二号、昭和五〇年三月)

最近刊行された森 浩一氏の『巨大古墳の世紀』(岩波新書、昭和五六年八月)にも「河内平野の考古学」の章で河内湖のことについて記されている。

(8) 氷野の地名は、『延喜式』に見える「讃良氷室」とつながりがあり、生駒山中でつくられた天然氷をここに運び、夏の輸送に備えたことに由来するものと考えられる。これについては稿を改めて考察を加えたい。

(9) 貝原益軒『南遊紀行』

ふかうの池は、深野池とかくと云。本名は茨田池と云。池の広さ南北二里、東西一里、所により東西半里許有。湖に似たり。其中に島あり。三カと云村有。故に此地を三カのおき共云。三カの島に漁家七八十戸あり。田畠も有。此島南北廿町、東西五六町有と云。此池に、鯉、鮒、鯰、はす、わたか、えび、鰻、つがに等多し。漁舟多し。日日舟に乗て漁し、魚を大坂にうる。又蓮多し。茨実みずぶき多く、葦多し。皆取用てたすけとす。殊に菱尤多し。是を採て飯にし、だんご鮎にし、粥にして糧とす。或は菓子にもする。又売て資とす。

(10) 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『西岩田遺跡』(昭和四十六年六月)

大阪文化財センター『河内平野を掘る―近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として―』(昭和五十六年八月)

火葬墳墓群と被葬者

- (11) 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡』第一部各説(昭和四一年〇月)
- (12) 上野利明氏「宅地造成工事に伴う墓尾古墳群隣接地の試掘調査」(東大阪市遺跡保護調査会『調査会ニュース』NO11・12、昭和五十四年三月)
- (13) 上野利明氏「東大阪市域における火葬墓について」(『東大阪市遺跡保護調査会年報―一九七九年度―』昭和五十五年一〇月)
- (14) 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡』第二部総説(昭和四二年六月)および藤井直正「日中友好の航跡」(『東大阪消防』第二五号、昭和五十五年八月)
- (15) 佐伯有清氏の『最後の遣唐使』には、良枝宿祢清上および朝生について述べられている。(同書三五・五四・一五ページ)ただし、「画師の良枝朝生、音声長の良枝清上らも、たぶん渡来人系の氏族であった」とされているのは系譜から見た限りでは誤りである。
- (16) 故今井啓一氏「昌泰年の河内国河内郡地売券について」(『大阪樟蔭女子大学論集』第四号、昭和四一年一月)
- (17) 藤井直正「古代の枚岡」(『枚岡市史』第一冊本編、昭和四二年五月)
- (18) 上田宏範・森 浩一氏「大阪府枚岡市石切町墓尾古墳群の調査」(『古代学研究』第二三号)
- (19) 東大阪市教育委員会『墓尾古墳』(『東大阪市埋蔵文化財調査概報8』昭和四十六年三月)

三 大坂城三の丸跡調査の所見

1 考古資料と民俗資料

昭和五十五年二月から五月にかけて、大阪市東区京橋前之町にある追手門学院大手前高等学校・中学校の敷地で発掘調査を行なった。同校の敷地は、現在の大坂城外濠の北側に隣接し、大坂城三の丸跡にふくまれている。同校では校舎の増改築が計画され、工事に先立って発掘調査が

必要となり、追手門学院大学から本学学長に招聘した日比野丈夫先生のご斡旋によって私が調査を担当することになった。

この調査の概要はすでに紹介し、⁽¹⁾『大坂城三の丸跡の調査』として近く刊行の運びであるが、とくに大きな収穫は、地下約二・五メートルの整地層の上面から検出した三カ所の土壇で、そのうちの二つ（SKO1・2）から多量の木製品と陶磁器片が出土したことである。これらの土壇は、層位と出土遺物の内容及び年代から、大坂落城時すなわち元和元年（一六一五）の大坂夏の陣、またはその直後における松平忠明の整備に際して不用品を投棄するために掘られたものと考えられるが、多種多様の木製品と土器・陶器・磁器が、ちょうどタイムカプセルのような状態で出土し、一つの時期における木製品及び陶磁器のセット関係を知ることのできる一括遺物として重要な資料となるものである。ここではその中でとくに木製品を取り上げて見たい。

全国各地の発掘調査において、多様な遺跡の存在と発掘方法の進歩によって木を原材料とする木製品の出土例が増加している。そうした中で、平城宮跡における木簡の発見は、地下に埋もれている考古資料にも、文献の不足を補う史料的高いものの存在することを立証したが、平城宮跡ばかりでなく、時期をさか上る飛鳥京跡・藤原宮跡や地方官衙・城柵からも出土し、年代も飛鳥時代から近世に至るまで各時代にわたっているのである。大坂城三の丸跡からも、従来の出土例に加えて今回の発掘調査で八点を加え、そのうち五点には墨書のあることがわかった。⁽²⁾これについては前記の報告書に栄原永遠男氏が詳細な論考を寄稿していただいた。⁽³⁾

その他、古代・中世の遺跡調査が増加するにつれて、多数の木製品を包蔵する遺跡の存在と多種多様の木製品の資料が知られることになった。静岡県浜松市の伊場遺跡、福井市一乗谷朝倉氏館跡、広島県福山市草戸千軒町遺跡、島根県能義郡広瀬町富田川床遺跡等である。

今回出土した大坂城三の丸跡の木製品も多様であるが、まずその種類を挙げると、

- a 木簡
 - b 舟型木製品
 - c 人形 ひとがた
 - d 塔婆・魚形
 - e 栓
- 信仰に関するもの

f 櫛……………装身具

g 漆器破片

h 漆器

i 下駄

j 下駄の歯

k 曲物

l 桶

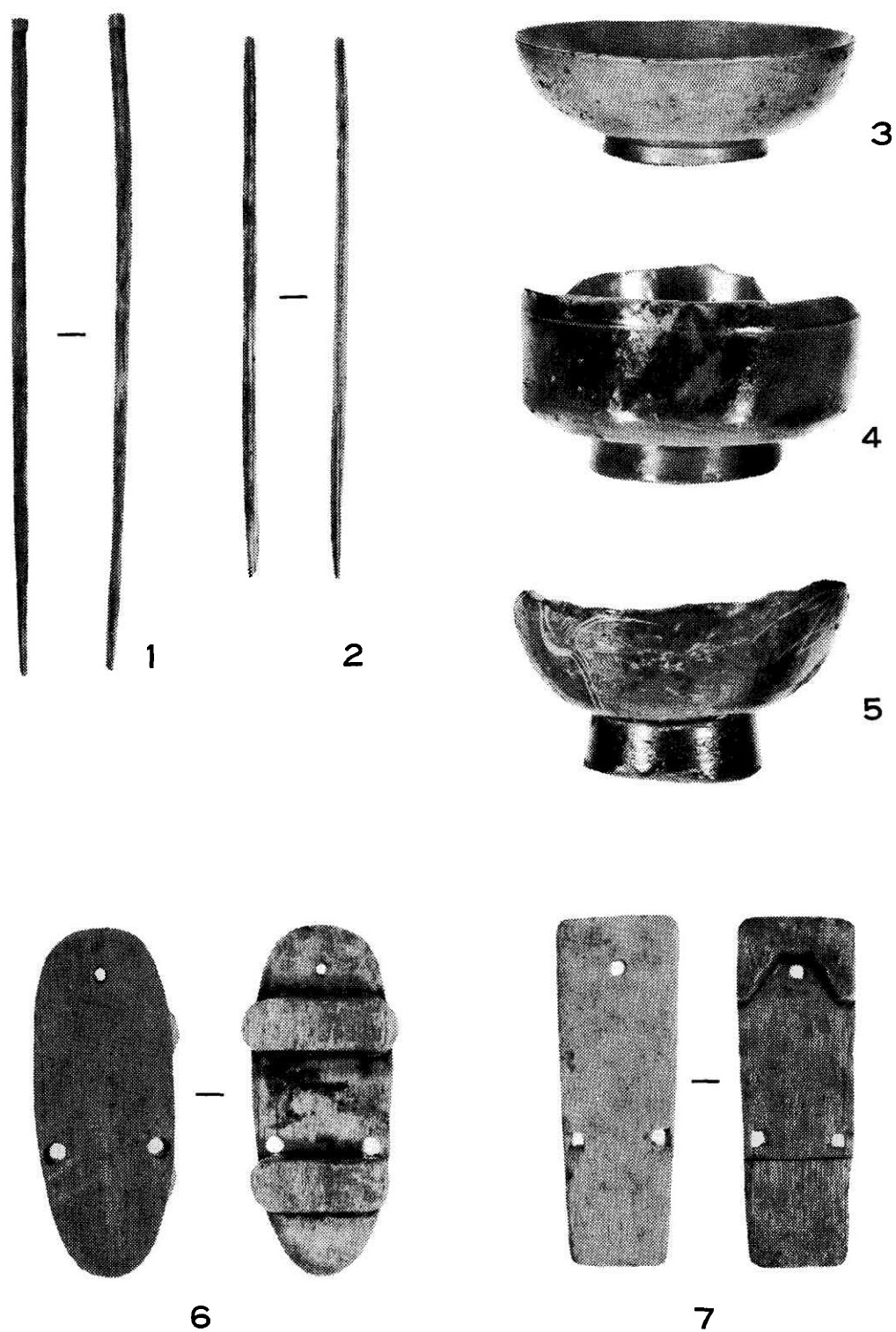
m 箸

n その他 ほうき・傘の骨・刷毛・すりこ木・灯明皿受・紡錘車・木匙・木槌・へら・盆等

o 建築材

に大別され、人形・舟形・魚形・塔婆（五重塔）など信仰に伴うものを除くと、ほとんどが日常の生活用具である（第7図）。これらの木製品は、一見したところでは、古代・中世の諸遺跡から出土している同類の品物とさほど違いが見られず、こうした木製品が、種類・形態あるいは製作手法においても保守的であり、言い換えれば伝統的な生産手段・方法に依拠していることを物語っているであろう。

これらの中で、とくに古い時期の遺物に見られないものが桶と樽がある。又これに伴う栓も同様で、桶がいつごろから作られ、使用されるようになったのかは未だ明らかでないが、これらは近世の木製品の特徴を表わしているとも言える。また古代・中世から存在したものであっても、機能の変化によって種類の上では同じでも形の上で大きく変わって来るものもある。その代表的な例として下駄がある。福山市松永に所在する日本はきもの博物館の潮田鉄雄氏のご教示によると、ほとんどが女子用または子供用で、どれも歯が磨耗するまで履きならしめて、この時代はかなり普及したとは言っても入手し難い貴重品であったこと、女子・子供用が多いことは、これが埋められていた土壌の近くに、常に床が湿っているところ、すなわち台所のような場所があったことを物語るだろうということである。長方形の下駄は“露地下駄”で、この時代に庭をもった建築と共に普及したものである。



第7図 大坂城三の丸跡出土の木製品（1～2 箸、3～5 漆椀、6～7 下駄）

さらに漆碗を見ると、高台が高く器種の厚い^{ば、つ、り、と、}したものは弥生時代以来の古い作りであるし、器壁の薄い洗練された作りのものもある。また漆の地が橙色というか柿色のもはいわゆる「根来塗^{ねくらぬり}」で、これを生産していた紀伊国の根来寺は、天正十三年（一五八五）豊臣秀吉の根来攻めによって灰燼に帰すのであり、それ以前に大坂に運ばれて来たものといえることができる。

このように個々の木製品についてさまざまな問題を孕んでいるのであるが、ここで考えて見たいのは次のような視点である。それは、これらの木製品は地下の遺構に埋もれて現代に伝えられ、発掘調査という手段によって取り出したものであるから、当然考古資料として扱われる。一方、これらと同種のもものは社寺やあるいは一般の民家に伝世品として存在している場合もあり、この場合には民俗資料又は民具として取扱われる。従って、同じ品物が二つの呼称、または分類に属することになり、これを学問的に資料として取上げる場合には、出土遺物は考古学者によって、旧家等にのこされている物は民俗学者がということになって、関連が求められないまま、あるいは連繋が保たれないまま今日に及んだというのが実情である。最近では、こうした状況への反省に立って「民具学」というものが提唱され、民具学会が創設されており、今後の発展が期待されるが、考古資料と民俗資料はもっと歩み寄る必要があるのではないだろうか。方法的に見ても、考古学では一つ一つの品物について実測図を作成し、その過程で製作手法を細かく観察して記録することができ、民俗学では図化することはあってもスケッチの程度で、考古学のように精密な実測図をつくることはまずない。先年、東大阪市教育委員会に在職中、文化庁の民俗資料緊急調査補助金の交付を受けて「河内木綿関係資料の調査」を行ない、耕作から製品に至る資料百数十点を収集したが、この調査を担当した北野節子さんは、一点ずつの資料をすべて考古学と同じ方法で実測図を作成した⁽⁴⁾。今回刊行する『大坂城三の丸跡の調査』では、加工されていない木片を除いて、すべての木製について実測図を掲載したのも、こうした視点に立って資料化したいという意図からである。

木製品の資料は、調査が進むにつれてより豊富になるであろうが、古代から近世、さらに現代に至るまでの各種類別の編年と形式分類を試みることが必要であり、資料の量から見れば可能であろう。この場合、古い時代のもものは考古資料を使用し、時代によって生じる不足の部分、あるいは年代の新しいものは民俗資料によって補うことができるし、両者を併用すれば、さまざまな木製品について時代別・年代別の編年ができるのである。

いずれにしても大坂城三の丸跡の木製品はこれまで出土例の少なかった近世初頭という限られた時期の木製品として貴重であり、さまざまな

角度からの研究に役立つものと思う。

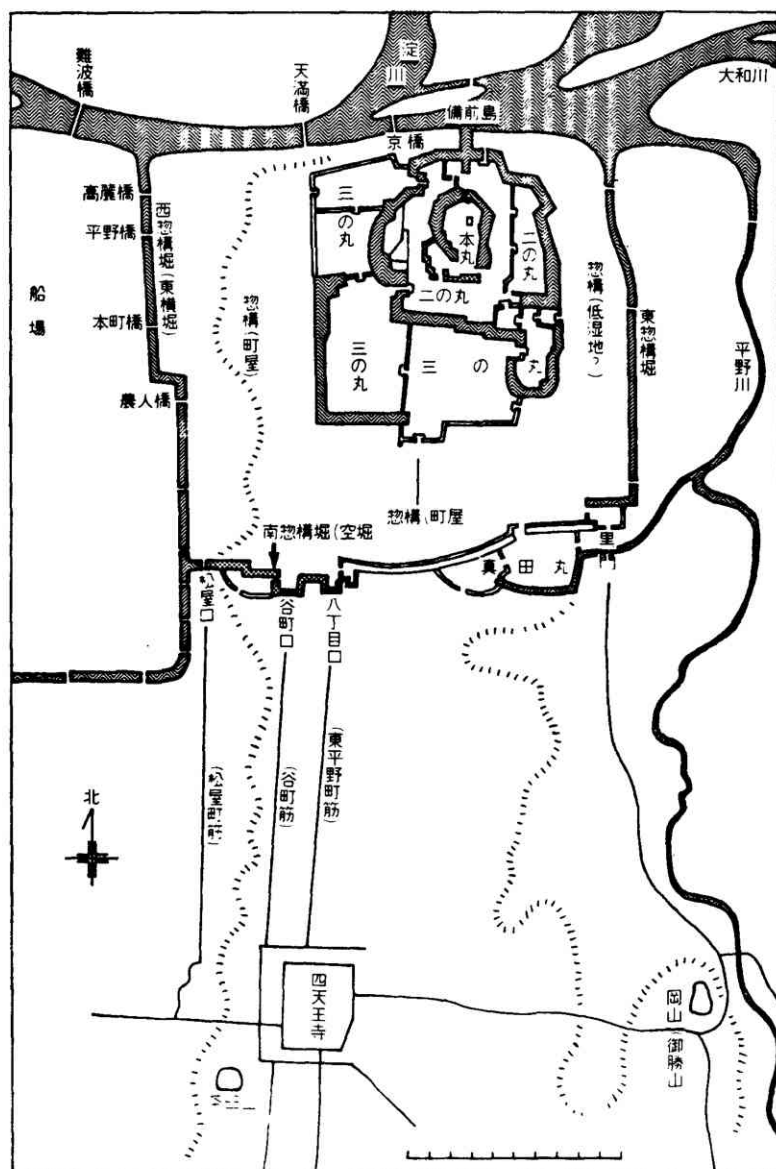
2 明治時代の遺構と遺物

わが大手前女子学園の本部と、学園の濫觴である大手前文化学院・大手前女子短期大学は、大阪市東区大手前之町に所在している。学園では、年々の学生増にそなえて校舎一棟の増築が計画されているが、この敷地が「大坂城跡」として埋蔵文化財包蔵地に指定されていることから、本年の四月より建設工事に先立って発掘調査を実施している。調査は二期に分け、旧館東側のテニスコート跡地約二〇〇平方メートルについてはすでに調査を完了した。

天正十一年（一五八三）、豊臣秀吉が築城を開始した大坂城は、慶長十九年（一六一四）、翌元和元年（一六一五）の大坂冬・夏の陣によって灰燼に帰し、その直後、徳川家康は松平忠明に命じてその復興と町並の整備に当たらせ、さらに元和七年（一六二一）、諸大名に命じて新しい大坂城の構築が開始された。この時に当たって、秀吉当時の旧構を払拭し、徳川家の權威を誇示するため、地盤を上げ、壮大な石垣で取り巻いた外濠を掘削するなど、秀吉の築城に勝る大規模な造営工事であった。このことは本丸跡における旧地盤のボーリング調査や、昭和五十五年に行なった追手門学院高等学校・中学校敷地の調査によって次第に明らかになって来ている。

秀吉築城当時の大坂城は、本丸を中心として二の丸が圍繞し、まわりに三の丸があったと考えられ、さらにその外側を惣構として、北は大川（旧淀川）、東は猫間川、南は空堀、西は東横堀（船場一帯の治水のため秀吉が開削した）に及ぶ広大な範囲を占めていた（第8図）。この三の丸については、従来から考察が進められ、その範囲を想定されて来たが、史料が乏しく不明な点が多かった。先手、仙台市で発見され、大坂城天守閣主任の渡辺 武氏によって紹介された『倭台武鑑』にのせられている図面によって、三の丸の状況が、ある程度具体的に知ることができるようになった。⁽⁶⁾

大坂城跡を対象とする考古学的調査は、先にも述べた本丸跡でのボーリングによる地盤調査や、築城以前に存在した法円坂町の難波宮跡、あるいは森の宮東之町に所在する森の宮遺跡の調査等において、上層に存在する中・近世の遺構・遺物の調査がある。これらに対して、当初から大坂城跡を対象としたのは、追手門学院の敷地が最初であるが、今回の大手前女子学園の敷地については、面積は猫額大の些少なところである



第8図 豊臣時代大坂城の想定図

豊臣時代の大坂城のうち、本丸の部分については詳細な絵図が伝えられている。これに対して、外郭部すなわち二の丸・三の丸、さらに惣構を描いた絵図は見つかっておらず、推定の域を出なかった。先年、仙台市で発見された『偃台武鑑』所載の図は、大坂城の全容がわかり、とくに三の丸が明瞭に描かれている点で貴重である。

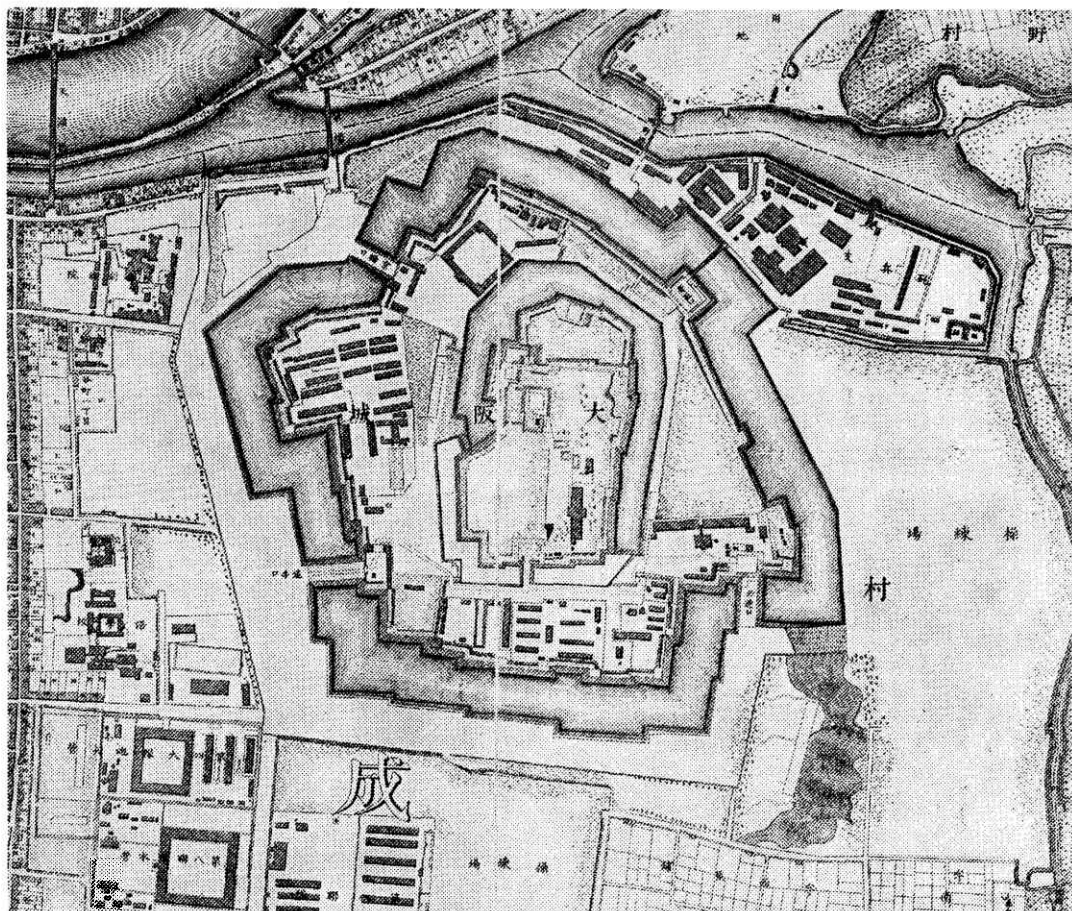
本図は、それを基にして作成されたもので、豊臣時代の大坂城が広大な区域にひろがっていたことがわかる（渡辺 武氏『黄金の城』『大阪人』第35巻第4号所収の附図）。

が、大坂城跡はもとより、その上に当然存在する明治時代以降の遺構についても注意を払い、それを記録すると共に、これらの遺構に伴う新しい遺物、従来の考古学としては対象とせず、機械掘削によって除去してしまうことが当然として行なわれて来た明治・大正・昭和の遺物も、逐一、層位を確認しながらそのすべてを採集するという方針に立って実施した。

大阪市域における遺跡の調査は、日本史上大きな意味をもっている四天王寺旧伽藍跡や難波宮跡など、古代の遺跡は別として、ほとんどがまったく市街地にあるために、これまで注意が払われることがなかった。大坂城を中心とする上町台地北端の地域には、特別史跡に指定されている大坂城跡ばかりでなく、三の丸跡にふくまれる広大な区域があり、江戸時代の絵図を見ると、外濠の南から東方にかけて武家屋敷が並び、西部には大坂東町奉行所等、大坂城を中心として近世大坂を治める行政の中枢的役割を果たした諸施設が所在していた。明治維新によって、幕藩体制は崩壊し、大坂城をとりまくこれら諸機関の役割は終焉を迎えたが、大坂鎮台・大阪司農局を経て、明治十四年（一八八一）に大阪府に統合されるまでの間、大手前の地には、やはり明治新政府による諸機関がおかれていた。さらに明治四年（一八七一）ごろから、城内をはじめ城の南から南西部にかけては陸軍関係の諸機関・諸施設がこれらの跡地を利用して設置された（第9図）。これらの様相は昭和二十年（一九四五）の敗戦によってさらに一変し、現在は大阪府庁・合同庁舎・府警本部等の建物が櫛歯している。しかし、こうした変遷をたどって来た地域である以上、その地下にはこれらの施設が遺構として存在しているはずであるが、これまではまったく注意も払われることのないまま現在見られるような官庁街が建設されて来たのである。

とくに陸軍関係の施設は、『大阪市史』『東區史』等に記録されているが、昭和二十年（一九四五）の大阪大空襲、さらに敗戦直後における諸記録の焼却によって、も早その状況はわからなくなっていることが予想される。従って、地下の遺構を対象とする考古学の役割は、この地域においては近世はもとより近代にまでくり下げる必要があるものであり、今回の調査はこのような観点に立って明治時代の遺構の検出と記録にとどめることを試みたのである。

さて、大手前女子短大の敷地では、テニスコートの直下に約二〇メートルの焼土層がある。とりも直さず、土地に刻まれた昭和二十年三月十三日の払暁、戦時下を生きた私たちにとっては忘れることのできない大阪大空襲の記録である。その下三〇〜四〇センチは盛土であるが、次に若干遺物を包含する土層（第Ⅵ層）がある。その下では、幅八〇センチ、深さ三〇センチの南北に走る溝があり、この中には建築材として使用されていたと考えら



第9図 明治20年『大阪実測図』に見える大阪城

明治時代になると、わが国でも測量にもとづく精密な地図が作成されるようになった。そのはじまりは、明治18年(1885)の仮製地形図で、現在の国土地理院の1/25000 1/50000図に受け継がれているが、当時の縮尺は1/20000であった。

本図は、明治20年(1887)に作成された『大阪実測図』(縮尺1/10000)の部分である(原本は藤井家蔵)。大阪城本丸には第四師団司令部(現在の大阪市立博物館)が建ち、二の丸跡には、陸軍関係の建物が立ち並んでいる。城の西北に当たる大坂東町奉行所の跡は「陸軍副病院」と記され、追手口の前すなわち現在の大手前一带は空白となっている。その南にある「語学校」は含密局の後身である英語学校、本町筋をへだてた南側には「第四大隊砲兵營」さらに南は「第八聯隊本營」と「第八聯隊歩兵營」が上町筋の両側に建っている。

これらの区域は、現在官庁街となっているが、明治維新以来百余年間におけるはげしい変容ぶりを如実に物語っているである。原田伴彦・矢守一彦・矢内昭氏『大阪古地図物語』(昭和55年7月、毎日新聞社)参照。

れる煉瓦を砕いて溝内に詰め込まれていた(第11図)。これが約十七呎つづき、それから先は、十七本の土管が並べられ、漸次下降して北側の道路下に及んでいることがわかった。土管といえは、愛知県常滑市が生産地として有名であるが、この土管も常滑製で、内径三一センチ、長さ六九センチの大型のものであり、組合せの部分は漆喰を巻いて固められていた。排水溝と考えられるが、溝の左右は地面がよく固められていて、ここに建物が存在していたことがわかる。それは藤井健造理事長のご記憶によって、明治四年(一八七一)に創設された大阪衛戍病院に伴う医員廐(軍医所用の馬をつなぐ厩舎)と推定されるが、これを遺構の上で確認できたことは大きな成果であった。この整地面は約四〇センチの厚みがあり、上下二層(第Ⅷ・Ⅸ層)に分かれるが、の中には大量の屋瓦片と土器・陶器・磁器の破片がふくまれていた。

屋瓦は、巴文端丸瓦・唐草文端平瓦をセットとする本瓦葺所用のものと、丸瓦・平瓦が一つとなった棧瓦葺所用のものがある。考古資料としては扱われたことの少ない江戸時代・明治時代の屋瓦であるが、一つずつ検討すると瓦屋のマークをスタンプしたのを見出した。

土器は数の上では少ないが、土釜・燈明皿など古くからの器種に加えて、焙烙・七輪などは時代色をあらわしている。多種多様なのは陶磁器で、陶器では挿鉢がある。口径五〇センチの大きいものから十五センチ程度のものまでさまざまで、全体に目が細かく中・近世の挿鉢とは違っている。ほとんどが備前焼であるが、若干、丹波焼と見られるもの、土管と同じ器質でマンガンを鉄にまぜた釉薬を施した常滑の製品があるように思われる。これらを資料とした場合、中世から近世を経て現代に至る挿鉢の編年が可能である。次に施釉陶器であるが、多彩を極め、近世とはまったく様相を異にし、器種の上からも器形の上からも、も早〇〇焼などと言い切れるものではない。屋号・町名の入った徳利・猪口・湯呑茶碗・花立・ゆきひら等、出土遺物というよりも、古い家の水屋の中に並べられている民俗資料である。磁器も多彩で、伊萬里焼・京焼が圧倒的である。興味を惹くのは、薄手の小さい猪口で図柄の上に「浪速天保山景」と書かれている。天保山は天保二年(一八三一)、幕府の命によって淀川の下流の一つ、安治川の浚渫が行なわれ、川底から揚げた土砂を川口に積み上げた人工の山で大坂の名所であった。この猪口に描かれている図柄の木造燈台は、明治維新後取こわされて石積みにかわったことが知られており、この猪口の作られた年代を物語っている。こうした点から、第Ⅷ・Ⅸ層の遺物は幕末から明治初年にかけてのものと見られ、日常の雑器類である。この敷地の整地に当たって近くに存在した建物の取壊しの際に不用となったものを運び込んだと考えられるが、江戸時代のものについては道を距てた北側の大坂東町奉行所の遺品であった可能性が大きい。



第10図 大手前女子短大敷地検出の豊臣時代遺構



第11図 明治時代の溝

これらの層の下は、砂を混じえた黄褐色土層となり、上町台地の自然層と考えられる。調査区域の中央ではこれが下降して行き、その上を青灰色粘土層が掩っていた。これを除去すると木製品・屋瓦・土器・陶器片をふくむ黒灰色土層が存在している。金色が燦然とのこる金箔瓦が出土したのはこの個所で、大坂落城時にさかのぼる三の丸跡と考えられる遺構の検出が予想される(第10図)。

ところで、全国的に見ると、広島県福山市を流れる芦田川の下流の中洲で、明王院の門前町・市場町であった草戸千軒町遺跡と、福井市足羽町一乗谷に所在する越前国の守護大名朝倉氏館跡の二つは、中世遺跡の代表的な発掘調査である。その他、城跡・館跡の調査は全国各地で進められている。さらに都市遺跡の調査についても着手され、広島県尾道市や福山市の鞆之浦等の港町や、平安京以来連綿とつづく京都市では地下鉄烏丸線に伴う調査をはじめ、平安京域での開発行為は事前の発掘調査が義務づけられており、古代・中世に港町としてさかえた博多をもつ福岡市でも地下鉄工事に伴う発掘調査が進められ、数かずの成果が報じられている。わが大阪府では、中世の自治都市として日本史上名高い堺での調査がようやく着手されたが、大坂城跡をふくむ大坂の町は都市遺跡としては認識されていない。

大坂城跡として埋蔵文化財包蔵地として指定されている大阪城の周辺、とくに大手前の地域は、すでに公共・民間をふくめて鉄筋の建物が櫛歯し、地下遺構の調査などがえり見られないまま今日に及んでいる。大手前女子学園校地の西側には、広大な府立大手前高等学校のグラウンドがあるが、江戸時代の大坂の絵図を見ると侍屋敷の並んでいたことがわかる。この敷地の中に、昨年度に体育館とプールが建設されたが、工事に先立って発掘調査が行なわれたという話は聞かない。これが文化財保護行政を担当する大阪府教育委員会の文字通りお膝下でのできごとである。追手門学院の校舎建築では、周知の遺跡であるにもかかわらず建築確認申請が提出され、すでに杭打ちを終わった段階で大阪市教育委員会が工事の中止と発掘調査の実施を指示した。一方では、大阪府の施設が周知の遺跡に対して発掘調査を行なうことなく進められているのである。

大手前の地域を注意して見ると、大坂東町奉行所跡の石垣や、大手前高校グラウンド西沿いの堀の基礎となっている石垣は江戸時代のものである。広大な地域に官庁等の建物が並んでいるとはいえ空地は随分のこされている。今後は、公共機関・民間を問わず、この地域において行なわれる一切の建設・土木工事に際しては、発掘調査を義務づけることが必要であり、大阪府・大阪市当局が連携した上での強力な行政措置と、それに伴う調査体制が確立されなければならないと考える。

歴史時代考古学の視点

こうした現状の中で、微小な区域ではあるが、校地学術調査委員会を組織し、原因者負担による多額の経費と、校舎建築の延引等の犠牲をかえりみず校地の発掘調査を実施しているのは、以上に述べて来た視点に立脚しているからであり、藤井健造理事長の、地下に埋もれた校地の歴史の究明に寄せられている情熱と英断の賜物であることを特に銘記しておきたい。

注

考古資料と民俗資料

- (1) 追手門学院校地学術調査委員会「大坂城三の丸跡の調査」(『考古学ジャーナル』第一八一号、昭和五五年一〇月) および藤井直正・木下 亘「大坂城三の丸跡の調査」(『日本考古学協会第47回総会資料』昭和五六年五月)
- (2) 藤井直正・栄原永遠男氏「大坂・大坂城三の丸(京橋口)遺跡」(『木簡研究』第二号「一九七九年出土の木簡」所収、昭和五五年一月)
- (3) 栄原永遠男氏「現大坂城周辺出土の木簡」(『大坂城三の丸跡の調査』所収)
- (4) 東大阪市教育委員会「河内木綿」(『東大阪市文化財調査報告書』第二冊、昭和四八年三月)

明治時代の遺構と遺物

- (5) 岡本良一氏「大坂城」(岩波新書、昭和四五年一月) にわかりやすく説明されている。
- (6) 渡辺 武氏「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構について」『偃台武鑑』所収「大坂冬の陣配陣図」を中心に(『難波宮址の研究第7』論考篇所収、昭和五六年三月)